114
A 2546

營業稅法案ニ對スル意見

本案ニ對シテ考究スヘキ要點二アリ一ニ曰リ本邦ノ今日ハ新稅法ノ施行ニ適スルノ時世ナルヤ二ニ曰ク本邦稅制ノ發達ト其將來ノ方向トヲ觀察スレハ營業稅ハ果シテ國庫ノ稅源トナスヘキモノナルヤ是レナリ

第一時勢ニ依テ之ヲ觀ルトキハ本邦ノ今日ハ稅法ノ改革ニ最不適當ナル期節ナリ何トナレハ今日ハ專制政治ヨリ立憲政体ニ更遷スルノ秋ニシテ邦家未曾有ノ大改革ニ遭遇スルノ時

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

ナレハナリ古今各國ノ経歴ヲ観ルニ孔ノ専制政治ヨリ立憲政体ニ遷ルノ當時ニ於テハ民心激昂シ政治上ノ熱度非常ニ上昇スルヲ例トス英佛獨墺ノ諸國実ニ之ヲ経驗シ其干戈ヲ動カサスシテ平穏ノ更遷ヲ為シタル邦國ハ実ニ希有ニ属シタリ亦邦國ヨリ事情ヲ異ニスルヲ以テ欧洲ノ例ヲ推シテ之ヲト定スルカラスト雖モ而カモ國會開設ノ前後一二年間ニ於テ民心激昂シ政論熱沸スルハ必然ノ勢ニシテ到底避ケ能ハサルモノナリ是時ニ當リテ邦家ノ為ノ特ニ意ヲ用ユヘキハ民間営利ノ事業ヲシテ成ルヘク変動ナカラシメ人民ヲシテ各ヘ其業ニ安セシムルニアリ若シ然ラスシテ其未曾有ノ大変革アルト同時ニ凶荒ノ如キ物價変動ノ如キ税法改革ノ如キ苟クモ人民各自ノ営業ニ変動ヲ起サシムルモノアレハ苦情囂々往ニ騒擾ノ端トナリ或ル過激ノ徒其機ニ乗シテ民心ヲ挑発シ竟ニ火焔ヲ発スルニ至ルモ未タ知ルヘカラス故ニ二十三年ノ大事業ヲ竣成スルマテハ民間営利ノ組織ニ変動ヲ起サシメサルヲ以テ

政治上第一ノ緊要トス

抑〻租税ナルモノハ納税義務者必シモ之ヲ負擔スル〻アラスシテ大抵之ヲ他人ノ負擔〻推移スル者ナリ故〻當初之ヲ賦課スルノ際〻於テハ縱令不平均〻シテ負擔平等ノ原則〻適セサル所アルモ積年因襲ノ久シキ竟〻當初ノ不平均ヲシテ漸次〻平均セシムル〻至レ是レ財政學〻於テ「租税負擔ノ轉移」ト称スル経濟上自然ノ法則〻由テ然ルモノ〻シテ畢竟多年積習ノ結果タラサルハナシ租税負擔ノ轉移ハ課税セラレタル物體ノ種類〻從テ全部ナルアリ一部ナルアリ後慢ナルアリ急激ナルアリテ固ヨリ一定セスト雖モ緊シテ不動産〻課スルノ税〻在テハ甚タ後徐〻其税額ノ一部ヲ他〻推移スル之〻反シテ営業税〻在テハ税額負担ノ轉移往々急速〻起リ或ハ其営業品ノ代價ヲ騰貴シ或ハ職工ノ給料ヲ減シ其他各種ノ事業〻千百ノ変動ヲ起シテ以テ負担ノ平均ヲ得ントスルノ求ムヘシ此際特〻恐ルヘキハ営業者中〻計利上ノ競争ヲ起シ資本ノ大ナル営業者ハ資本ノ小ナ

ル営業者ヲ壓倒シ即チ大営業者ハ其税額ヲ他
ニ推移スルニ於テ容易ナルモ小営業者ハ之ヲ
為スニ難ク往々其全額ヲ自ラ負擔スルノ外ニ
尚大営業者ノ税額マテ一身ニ負擔スルコト是
ナリ是等ノ関係ヨリシテ起ル経済社會ノ変動
ハ僅ニ数月ニシテ鎮静セス延テ数年ノ久シ
キニ亘ルヽシ又其変動ハ一小地方ニ止ラス延
テ全國ニ渉ルヽシ何トナレハ本案ニ依テ課
税セラルヽ者ハ全國一般ノ営業者ナレハナ
リ既政学者ワケ子ル氏ノ言ニ曰ク「凡ソ税法ノ
改革ハ設令其新税法、完全無缺ノモノニモセヨ
又設令其改革ノ為ヲ全体ニ於テ別ニ租税ノ負
擔ヲ加重セサルニモセヨ一時人民ノ産業ニ障
碍ヲ與ヘ社會ニ一ノ波瀾ヲ起スモノナリ是レ
税法ノ改革ニ隨伴スル所ノ避ケヽカラサル結
果タリ古今ノ政治家税法ノ改革ニ苦心スル所
ハ実ニ此点ニアリ」ト又欧米財務家ノ説ニ曰ク
「人民ノ慣習シタル旧税法ハ皆可ナリ學理ヨリ
生シタル新税法ハ皆不可ナリ」ト此語ヤ古今名
國ヲ通シテ適用スヘカラスト雖モ而カモ欧米

ノ実務者ヲシテ此語ヲ発セシムル所以ノモノハ畢竟年月ヲ経テ民生ニ慣レタル税法ハ既ニ負擔ノ平均ヲ得テ産業社會ニ自然ノ権衡ヲ保タシムルモノナルニ新ニ施行スル税法ハ営業上ノ権衡ヲ打破シ計利ノ方向ヲ撹乱シ数年ヲ経ルニアラサレハ復ヒ静穏ノ道ニ就カサルノ故ヲ以テナリ

新ニ営業税ヲ施行スルニ因テ民間営利ノ事業ニ一大波瀾ヲ起スヘキハ右ニ述ヘタルカ如シ而シテ其税率ハ本案ニ依ルニ甚タ重カラサルモノ、如シト雖モ現ニ地方税及区町村費中営業割トシテ全國ノ営業者ヨリ徴收スル金額ハ毎年三百三拾一萬八千円餘ナルヲ以テ此上、國税ヲ課スルトキハ営業者ノ負擔ハ今日ニ二倍若クハ三倍スヘシ其経済社會ニ変動ヲ起スヘキハ火ヲ覩ルヨリモ明カナリ而シテ其変動ハ前陳シタルカ如ク國會開設政論甦沸ノ時ニ於テハ全國ノ沿安上ヨリシテ最嫌忌スヘキモノタリ

第二假リニ今日ノ時世ヲシテ税法改革ニ適ス

ルモノト定ルモ営業税ヲ国税ノ一ニ列セシム
ルノ利害得喪ハ尚一歩ヲ進メテ考究セサ
ルヘカラサル者アリ抑各種ノ租税ハ一得一失
アリテ或ハ賦課ノ平均ヲ得ルニ難キモノアリ
或ハ巨多ノ徴收入費ヲ要スルモノアリ或ハ税
源トナルヘキ收獲ヲ辨知スルニ難キモノアリ
今営業税ハ直税中ノ最不利最不便ナルモノニ
属ス語ヲ更ヘテ言ヘハ営業税ハ各種ノ租税ニ
隨伴スル而失ヲ保有スルモノナリ是レ本官ノ
私言ニアラス各国ノ営業実務家ノ擧ケテ是認

スル所ナリ故ニ各国ニ於テ今日尚営業税ヲ国
税トシテ施行スルハ其歴史上ノ沿革ヨリシテ
之ヲ保續スルニ過キス英国ハ主トシテ間税ヲ
以テ国費ヲ支ヘ直税ハ殆ト之ヲ擧ケテ地方税
ニ譲與シタリ（全国直税ノ四分ハ地方税ニ五分ノ属ス）殊ニ其ノ直接
国税トシテ現行スルモノハ僅カニ地税（年額石五万五千二百七十九万磅）及所得税（同上石万磅ノ三種ニ
過キス国ノ営業税ハ僅ニ二三ノ特別営業者ニ
課スルモノアルノミ（年額二石万磅）佛国ハ有名ナル営
業税ヲ施行スルモ国家ノ主トシテ財源トナス

モノハ間税トアリテ直税トアラス千八百七十一年獨逸ト交戦シタル後各種ノ税ヲ増重シタルト當リ獨リ直税ノミハ甚タシク増率セサリキ是レ直税ノ國税タルトヲ適セサル一證トナスヲ得ヘシ獨逸帝國ハ間税ノミニテ政費ヲ支弁シ嘗テ直税ヲ施行セス字國ニ於テモ亦営業税ハ當世紀ノ初メニ於テ施行シタル儘ヲ継續シ絶テ進張スル所ナク之ニ反シテ所得税法ニ至テハ五十年来大ニ之ヲ改良シタリ蘆索尼ニ於テハ千八百七十八年税法改革ヲ行ヒ新ニ普通所得税ヲ起シ從来ノ営業税及人税ヲ全廃シ且大ニ地税ノ率ヲ減シタリ又ニ名國ニ於テ其税法ノ年々ニ発達スルニモ拘ハラス営業税ハ獨リ四態ニ止マリ或ハ全ク之ヲ廃シ或ハ之ヲ地方自治体ニ譲與スル所以ノモノハ即チ営業税ハ國税トスルニ最モ適當ノモノタレハナリ本邦ニ於テ欧洲風ノ税法ヲ実施スル日尚浅ク未タ俄カニ各種租税ノ利害得失ヲ判断スヘカラスト雖モ今維新以来ノ実験ニ徴シテ将来税法ノ方向ヲ推考スルトキハ営業税ハ本邦ニ於

テモ尤国税ト為サヽルヲ得策トス明治十一年
地方税ヲ施行シタルヨリ以来家屋税及営業税ノ二
者専ラ地方ニ行ハレ既ニ十年ヲ経過シタリ将
来ニ於テモ英国ニ於ケルカ如ク此二税ヲ一ニ
地方税ニ譲與シ政府ハ専ラ間税ニ向テ財源ヲ
求メラレンコト最良便ナルカ如シ
上文営業税法ニ代ヘテ寧ロ間税ノ擴張スル事
ヲ論シタリト雖モ今日ノ時勢ハ税法改革ニ適
セザルヲ以テ止ムナキ事情アルニアラサレハ
其間税モ猶之ヲ起サヽルヲ得策トス

或ハ今回新ニ営業税ヲ起サントスルノ目的ハ
地租減軽ヲ行ヒテ其減租ヨリ生スル政費ノ不
足ヲ補フニ在ル者ナレハ全国人民ニ對シテ此
ノ一方ノ負擔ヲ減シ彼ノ一方ノ負擔ヲ增スニ
過キスト謂ハンカ然レトモ減租ハ一大美挙ナリ
抑政費ヲ減スルニ起因シテ地租ヲ減スルノ結
果ヲ得ルハ果シテ一大美挙ナリ然ルニ地租ヲ
減シテ其不足額ヲ営業税ニ取ラントスルハ極
メテ下策ナルコトヲ免レサルノミ減租ノ件ニ
関シテハ別ニ意見ヲ具ヘテ更ニ高裁ヲ仰カン

ト欲ス謹白

明治二十一年十二月二十日　井上毅

大蔵大臣閣下

別紙

新ニ営業税ヲ園税トナシ且其ノ税額ヲ増加スルノ不可ナルハ已ニ別案ニ於テ之ヲ陳述シタリ今地租ヲ減スルニ付更ニ意見ヲ啓申セントス

抑我邦ノ地租ハ明治六年封建時代ノ年貢制度ヲ改メ土地ノ收穫ニ基ツキ賦課法ヲ定メタル者ニシテ文明政治ノ元則ニ移ヒタル改正ト云ハサル一カラス但シ経済上ヨリ之ヲ観ルトキハ高額ナル地租ヲ課スルハ農業ノ進歩ヲ妨ク

ルコト少ナシトアラサルヘシ而幕以来農民課税
ノ度ハ純益ノ大半ヲ占メ現今地價百分ノ二ヶ
半ハ亦殆牧獲十分ノ五ニ當リ已ニ之ヲ以テ其
ノ半ヲ奪フナルニ仍地方税町村費ヲ賦課スル
ハ其ノ高再ヒ十分ノ三ヲ占メ差セテ十分ノ八
ハ公費ノ為ニ奪ヒ去ラレ餘ス所ハ二分ニ過キ
ス即チ地租ハ最早牧獲ニ課スルニ止マラスシ
テ其ノ資本マテモ侵セテ奪ヒ去ルノ有様アリ
ト云フヘシ且ツ租税ノ額分ヲ減シテ以テ農
民ニ餘財アラシメ漸ク農業改良ノ資本ニ
充テシメンコトハ今日ノ急務ト云ハサルヘ
カラス
然レトモ今若シ地租ヲ減スルカ為ニ営業税ヲ
増税ニ移ストセハ是レ左ニ無ニテ右ニ取ルニ
外ナラス即チ朝三暮四ノ策ナリト云フヘシ又
地方ニ於テ営業税ヲ失ハヽ他ニ之ヲ充スヿヲ
税源ナカルヘカラス終ニ又之ヲ農ニ取ランノ
ミ之ヲ増税ニ減シテ之ヲ地方税ニ增サハ何ヲ
以テ其ノ減租ノ功ヲ見ン
抑減租ハ美挙ノ結果ニシテ其ノ原因ニ非サル

〳〵ヒ何ヲカ美譽ノ原因ト謂フ曰政費ヲ減スル
コトヨリ減費ノ原因ナクシテ減租ノ結果ヲ
望ム〳〵カラス蓋文武ノ制度百般更新ノ際巨
額ノ租稅ヲ收メテ政費ニ充ルハ誠ニ已ムヲ
得サル〳〵ノ情勢ナリト雖今日政府ニ於テ費ス所
ノ支出中緩急ノ度ニヨリテ之ヲ減シ得ヘキ
費目ナキニモアラサル〳〵ヒ誠ニ経濟ノ方策
ヲ一変シテ政費中各般ノ需用ヲ類別シ其ノ直
接ニ富殖ノ基ヲ開キ國ノ財源ヲ增進シ及人
智ヲ開発スルニ属スルモノヲ第一ノ必要トシ

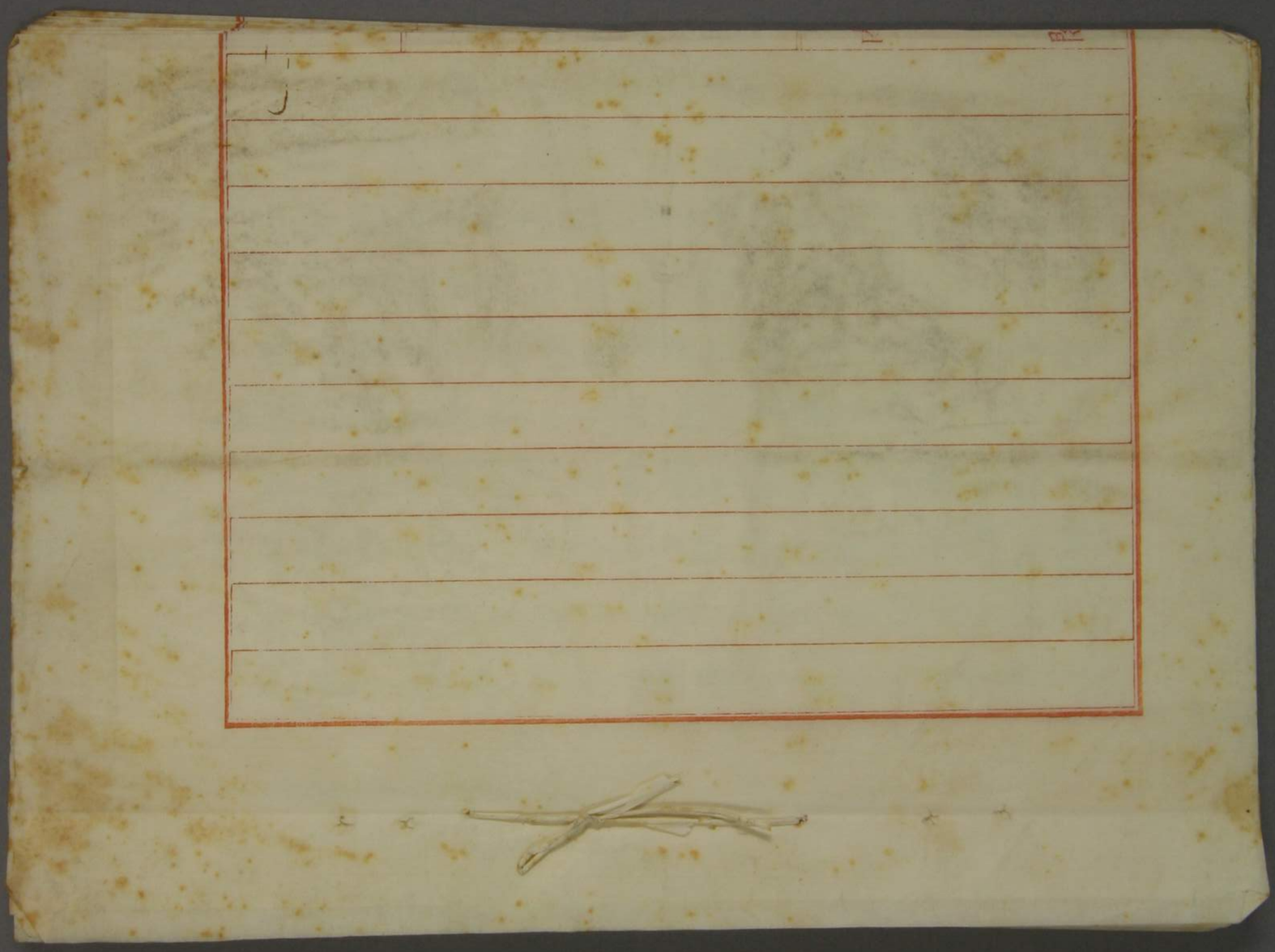
自衛國防ノ目的ニ属スルモノヲ第二ノ必要ト
シ其ノ他形式ノ備文太平ノ裝飾観美ニ属ス
ルモノヲ第三ノ必要トシ第三ノ必要ハ外交ノ
禮儀ヲ除ク外宮中府中ニ拘ラス悉ク之ヲ廢
除シテ特来十年ノ後國ノ富源增殖ノ日ヲ待
ツ〳〵シ殊ニ彼ノ建築ノ如キハ一切之ヲ停止シ
議事堂ハ假築ニ止メ旧来ノ省廳ハ之ヲ修理補
完シ單ニ実用ヲ缺カサルヲ以テ足レリトシ更
ニ又地方廳ニ諭達シ政府ノ旨ヲ体シテ地方官
ノ官宅ヲ首トシ不急ノ土木ハ之ヲ興スコトナ

カラシメンカ此ノ如クセハ三四百萬円ノ金額ヲ節シ得ルヲ難シトセサルヽヲ此ノ節スル所ノ餘額ヲ以テ地租ヲ減スル所ノ缺額ヲ償フヽヲ而シテ又間接ニ人民ヲ親感セシメ上下調和、百令渙行、和気頌声ノ時運ヲ望ムコトヲ得ヘシ

今中央及地方ノ土木建築形式観美ノ事ハ其ノ民心ヲ失フノ集点タルヿト実ニ推測比例ノ外ニ出タリ今日ニ當リ将ニ去ラントスルノ人心ヲ收攬シ已ニ離レントスルノ輿望ヲ徒

讀シ以テ政府タルノ德義ヲ完全ニシ一國未來ノ命運ヲ救正スルハ決シテ空文徒法ノ能クスル所ニアラスシテ一ニ内閣ノ精神果断ニ依賴セサルヲ得ス言狂激ニ似タリト雖ト官ハ此ヲ除ク外決シテ減租ノ美果ヲ收ムヘカラス又倹セテ立憲ノ美果ヲ收ムルノ難キコトヲ信ス謹白

明治二十一年十二月二十日

大蔵大臣　井上馨

内閣